地域をフィールドとした地域連携教育の学びとその評価

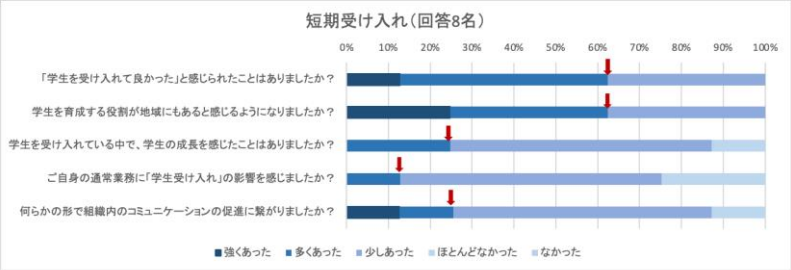
【代表者】岩瀬　峰代　　島根大学　大学教育センター　准教授

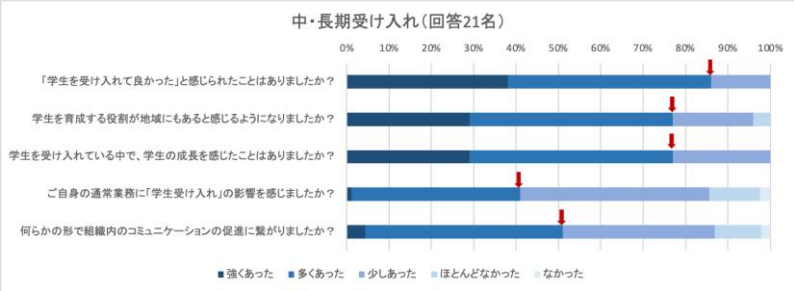
【研究の目的と内容】

地域連携教育は地域での問題解決活動を通じて地域への貢献を果たす目的と構造的な経験の機会を通じて学生の学習を促進する目的とを合わせ持つ教育方法であり、日本においても地域関連の教育競争資金の導入とともにフィールド教育として多くの大学に導入されている。

申請者はこれまで「教育とは、人々の成長・発達を促す経験の連続的な再編成」とする経験学習のスキームを用いてクリティカルリフレクションを促す教育を実施してきた。また、行動変容のルーブリックや経験学習の指標で評価することで学生の様々な学びを検出してきている。

本研究では授業において協働して実施してきた企業の協力者（短期：半日受け入れ）および地域連携教育における地域の協力者（中・長期：３日～１年受け入れ）へのアンケート調査を行い、地域連携教育が協力者に及ぼす影響を調べた。その結果、「学生を受け入れて良かった」「学生を育成する役割が地域にもあると感じる」「学生の成長を感じた」といった教育プログラムの教育的意義を感じていた。さらに「ご自身の通常業務に学生受け入れの影響を感じ」、「何らかの形で組織内のコミュニケーションの促進に繋がった」と感じていた。その傾向は半日の短期においても示されたが、３日～１年という長期受入の場合は特に強く表れていた。



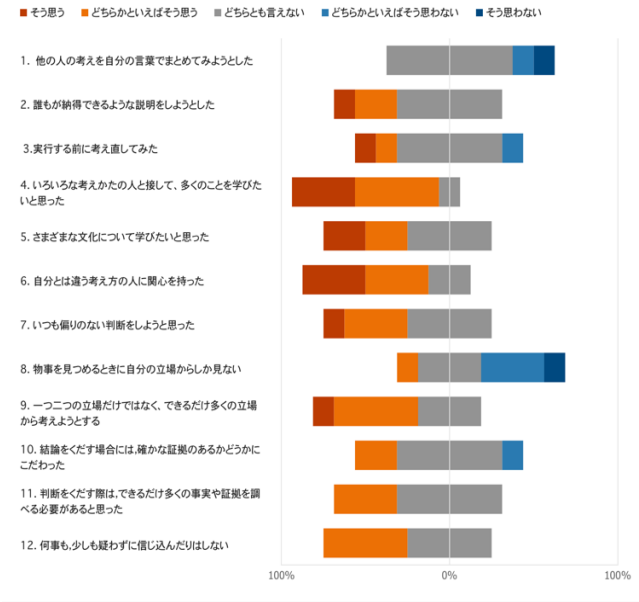


上記のように感じた理由として「学生の柔軟な考え方は企業にとって貴重」「普段聞けない視点の意見を聞く事ができた」「改めて現場のことを考える良い機会」「大学生を受け入れることで組織の活性化に繋がると感じた為」「組織内でのコミュニケーションが円滑になったことが大きいと思うし、そのきっかけを与えたのは学生の力だと感じた。」という意見が上がっており、協力者にとっても影響があったことが示された。

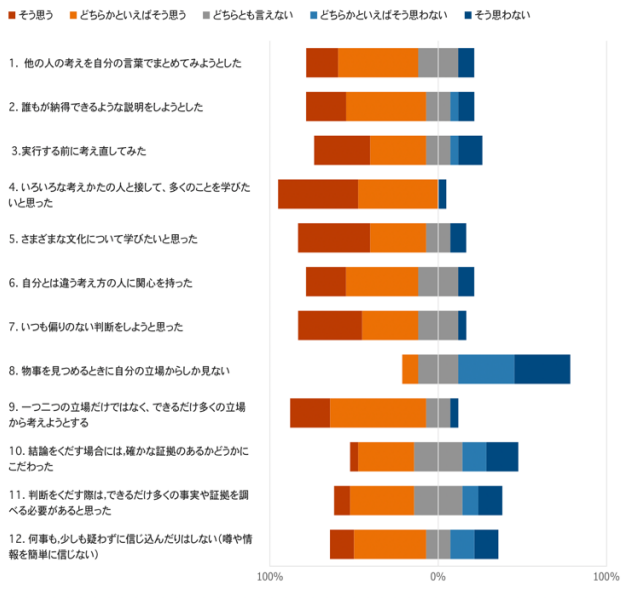
【研究の成果（本研究によって得られた知見、成果、論文、学会発表、外部資金への応募見込み等）】

さらに地域連携教育の協力者の方々にも受講生と同様にクリティカル・シンキングの認知的スキルに関する設問を提示し、自身を振り返ってもらった。質問に対して「そう思う」「どちらかといえば

短期受け入れ(回答 8 名)



中･長期受け入れ(回答 21 名)



そう思う」「どちらとも言えない」「どちらかといえばそう思わない」「そう思わない」の５件法で回答してもらった結果、「いろいろな考えかたの人と接して、多くのことを学びたいと思った」「さまざまな文化について学びたいと思った」「自分とは違う考え方の人に関心を持った」の探究心の３項目はいずれも「そう思う」と回答した方が多い。また「いつも偏りのない判断をしようと思った」「物事を見つめるときに自分の立場からしか見ない：反転項目」「一つ二つの立場だけではなく、できるだけ多くの立場から考えようとする」の客観性スキルも伸びている感じている協力者も多かった。自由記述欄には「組織の活性化に繋がると感じた」「施設、学生どちらにも良い刺激があると感じた」とあり、互恵関係がある（築くことが可能）と協力者の方々も考えていることが示されていた。

本研究プロジェクトによって、地域連携教育は受講生だけでなく協力者のクリティカル・シンキング認知スキル（特に探究心や客観性）を伸ばすことが明らかにされた。受け入れた組織内のコミュニケーションの促進することで「コミュニティ」にも良い影響を及ぼし、活動の場と活動者との互恵関係の構築に資する、つまり活動のプロセス自体も意義あるものと考えられた。

したがって、本プロジェクトに実施によって地域連携教育は学生への教育のみならず、教育と地域貢献の相乗効果があることが検証されたことを示すことになる。

今回得られた知見を用いて「地域連携教育の学びとその評価」の論文として日本学術会議（地域学分科会）に提出済みである。本プロジェクトによって大学が地域と連携することの意義を広く伝えることが可能となったと考えている。